

日本小児精神神経学会40年の歩み

「小児の精神と神経」第39巻第3号 別刷  
(1999年9月)

日本小児精神神経学会  
(株)アークメディア



# 日本小児精神神経学会40年の歩み

## 【企画の意図】

本学会は、1960年5月13日、「第1回小児精神神経学研究会」として、大阪にて盛大に開催され、同年11月には、機関誌「小児の精神と神経」が創刊された。

本会は、年2回の学術集会を開催し、十分な討議を行うという慣例にある。1992年1月には、本会の名称を「日本小児精神神経学会」に変更しているが、その慣例は今日まで受け継がれている。

本誌編集委員会において、発足以来40年にわたる本会の歩み、特に第1回から80回までの学術集会の足跡を何らかの形で残せないかという提案がなされ、役員会の賛同を得て編集作業に取り組んだ次第である。

幸いに、学術集会の多くのプログラムが二次抄録として機関誌に掲載されていたこと、また、秋山前理事長のご好意により、初回から保存されていた抄録を編集の参考にすることができた結果、貴重な足跡をまとめることができた次第である。

構成としては、第1回から第80回までの学術集会について、開催日、開催地、会長名（世話人名）、主題、一般演題数をまず記載した。また、特別講演、教育講演、シンポジウム、パネル等については、演者並びに演題名について記載した。

加えて、機関誌「小児の精神と神経」との関連については、学術集会に関連した特集号や、特別講演、教育講演、シンポジウム、パネル等については、掲載された機関誌の巻・号を付記することによって、索引としても活用できるように配慮した。

編集作業を終えて、改めて本会の歩みを振り返ると、日本における小児精神神経学の歴史が生々しく再現されており、今後この資料が何らかの形で活用されることを期待したい。

なお、「40年の歩み」の編集に当たっては、編集作業を中心となって進めていただいた編集幹事である宮島氏の労に感謝申し上げる。

編集委員会

## 第1回小児精神神経学研究会

1960年5月13日 大阪市；田辺製薬5階講堂、世話人；高井俊夫

講演；慶応堂病院 小川三郎「わが国小児精神医学のあゆみ」

シンポジウム；「小児科領域に於ける精神・神経学上の課題」

- 1、高木俊一郎「相談の技術とテスト法についての検討」
- 2、田坂 重元「ホスピタリズム対策上の諸問題」
- 3、寺脇 保「精神身体医学的にみた小児科臨床」
- 4、坂本 吉正「小児てんかんの病態」
- 5、有馬 正高「脳性小児麻痺における核黄疽の意義」
- 6、岡崎 英彦「精神薄弱児に対する薬剤の効果」
- 7、石橋 泰子「心身障害児における家族関係」
- 8、新井清三郎「チームワークの問題点」

小児の精神と神経 39 (3) : 201 - 215, 1999

## 第2回小児精神神経学研究会（掲載誌1巻1・2号）

1960年11月3日 東京；慶応大学東校舎講堂，世話人；中村文弥  
一般演題；28題

招待講演；「脳性小児麻痺について」

- 1, 東京大学病理 向井紀二「病理について」
- 2, 東京大学小児科 福山幸夫「定義と分類について」
- 3, 整肢療護園 高瀬安貞「心理について」
- 4, 整肢療護園 小池文英「外科的治療について」
- 5, 九州大学小児科 梁井昇「治療教育の実際」

## 第3回小児精神神経学研究会（掲載誌1巻3・4号）

1961年5月10日 東京；東京大学医学部本館大講堂，世話人；高津忠夫  
一般演題；12題

シンポジウム；「小児の神経質と神経症」

- 1, 品川不二郎「心理学の立場から」
- 2, 上出 弘之「精神医学の立場から」
- 3, 田坂 重元「小児科学の立場から一乳児を中心として一」
- 4, 平井 信義「小児科学の立場から一幼児学童を中心として一」

## 第4回小児精神神経学研究会（掲載誌2巻1号）

1961年11月17日 広島市；平和記念会館，世話人；大谷敏夫  
主題；「言語障害」

一般演題；12題

特別講演；国立ろうあ者更生指導所 田口恒夫「小児の言語障害」

## 第5回小児精神神経学研究会

1962年4月19日 徳島市；徳島大学学生会館，世話人；北村義男  
一般演題；12題

特別講演；ケルン大学小児科 Bennholdt-Thomsen 「Schwererzihbares Kind」

## 第6回小児精神神経学研究会（掲載誌2巻4号，3巻1号）

1962年10月5日 新潟市；新潟県医師会館，世話人；小林 収  
一般演題；16題

特別講演；

- 1, 新潟大学脳研 沢 政一「発作の起こり方の電気生理」
- 2, 新潟大学外科 植木幸明「小児期てんかんの疫学的研究」

## 第7回小児精神神経学研究会（掲載誌4巻2・3号）

1963年3月28日 京都市；京都会館会議場，世話人；永井秀夫

一般演題；18題

特別講演；東北大学小児科 新井清三郎

「小児の精神発達—小児科からみたGesellの発達研究をめぐって—」

特別発表；京都心身障害児研究班 亀井正夫

「京都市学令期児童に於ける精薄児の疫学的調査」

#### **第8回小児精神神経学研究会**（掲載誌3巻4号，4巻1号）

1963年10月18日 熊本市；熊本農協会館，世話人；貴田丈夫

一般演題；17題

特別講演；熊本大学教育学部心理学教室 毛利昌三「精神薄弱の類型について」

#### **第9回小児精神神経学研究会**（掲載誌4巻3号）

1964年6月18日 札幌市；北海道大学，会長；南浦邦夫

主題；「小児の問題行動と性格異常」

一般演題；12題

#### **第10回小児精神神経学研究会**（掲載誌4巻4号）

1964年10月1日 金沢市；金沢大学医学部十全講堂，世話人会

主題；「脳炎・髄膜炎後遺症」

一般演題；10題

特別講演；国立国府台病院精神科 後藤彰夫「日本脳炎後遺症」

#### **第11回小児精神神経学研究会**（掲載誌5巻2・3号）

1965年5月16日 名古屋市；愛知県医師会館，世話人；中江亮一

主題；「小児の習癖」

一般演題；12題

特別講演；名古屋大学精神科 堀 要「子供の精神療法」

#### **第12回小児精神神経学研究会**

1965年11月3日 東京；日独文化会館，会長；平井信義

主題；「問題を持つ子どもの心理的・医学的治療法」

一般演題；12題

特別講演；

1, Mount Sinai 病院 M. Murray Peshkin（掲載誌5巻4号）

「The Role of Emotions in Allergy of Childhood（小児期のアレルギーにおける情緒の役割）」

2, Wien 大学小児科 Hans Asperger（掲載誌6巻1号）

「治療教育学について」

### 第13回小児精神神経学研究会

1966年4月24日 静岡市；静岡県婦人会館，会長；新井清三郎

主題；「精神薄弱の早期診断とその取り扱い」

一般演題；17題

特別講演；静岡県立中央病院 清川安彦「脳性麻痺の診断と指導」（掲載誌6巻2号）

シンポジウム；「精神遅滞の早期診断と取り扱い」（掲載誌6巻3号）

- 1, 久保田正人「就学時の知能検査の問題点」
- 2, 高橋 彰彦「年長児から成人における精薄の診断」
- 3, 平井 信義「仮性精薄について」
- 4, 高木俊一郎「精薄小児の取扱いと指導」

### 第14回小児精神神経学研究会（掲載誌7巻1号）

1966年10月17日 東京；国立公衆衛生院，会長；船川幡夫

主題；「精神神経面における遺伝と環境」

一般演題；13題

特別講演；東京大学医学部脳研究所 井上英二「知能・知能発達障害の遺伝学」

### 第15回小児精神神経学研究会（掲載誌7巻2・3号）

1967年3月28日 名古屋市；名古屋大学医学部講堂，世話人；鈴木 栄

主題；「しつけ・小児精神神経面における薬物療法」

一般演題；16題

シンポジウム；「薬物療法の効果を何でとらえるか」

- 1, 新井清三郎「薬物療法の効果を何でとらえるか」
- 2, 小西 俊造「小児科臨床の立場から」
- 3, 寺脇 保「治療教育の立場から」
- 4, 牧田 清志「精神医学の立場から」

### 第16回小児精神神経学研究会（掲載誌7巻4号，8巻1号）

1967年10月12日 岡山市；岡山大学医学部講堂，世話人；浜本英二

主題；「周産期異常とその予後」

一般演題；13題

特別講演；神戸大学医学部神経科 黒丸正四郎

「Prae and Para-natal Brain Damage と行動異常との関連」

### 第17回小児精神神経学研究会（掲載誌8巻3・4号）

1968年5月24日 広島市；広島銀行講堂，世話人；大谷敏夫

主題；「小児科の精神衛生」

一般演題；16題

**第18回小児精神神経学研究会**（掲載誌9巻1号）

1968年10月4日 札幌市；札幌市民会館，会長；南浦邦夫

主題；「小児自閉症およびその周辺」

一般演題；10題

**第19回小児精神神経学研究会**（掲載誌9巻2号）

1969年4月2日 福岡市；福岡市民会館，世話人；永山徳郎

主題；「小児における家庭の指導」

一般演題；14題

**第20回小児精神神経学研究会**（掲載誌10巻1・2号）

1969年10月16日 東京；発明会館，会長；石橋泰子

主題；「社会小児科学へのアプローチ（小児科と心理教育社会）」

一般演題；21題

**第21回小児精神神経学研究会**（掲載誌10巻3・4号）

1970年6月27・28日 箱根；堂ヶ島温泉対星館，会長；小林提樹

シンポジウム；「小児精神神経学領域における検査法の利用と限界」

- 1, 上原 進「口腔所見の特徴と問題点」
- 2, 甘楽 重信「C.P.に見る脳波検査の利用と限界およびレ線撮影特に気脳術の利用と限界」
- 3, 金井 秀子「児童相談所における脳波検査の意義」
- 4, 上村 菊朗「医学的検査の検討（EEG検査，自律神経検査）」
- 5, 木村 隆夫「自律神経機能検査について」
- 6, 安藤 格「乳幼児に対する音刺激脳波の意義」
- 7, 有馬 正高「代謝異常」
- 8, 前川 喜平「5才までの神経学的検査」
- 9, 斎藤 久子「幼児におけるロールシャッハテストの2, 3の経験」
- 10, 神谷 育司「幼児期におけるベンダーゲシュタルトテストに示された心理的特性について」
- 11, 今村 重孝「ベンダーゲシュタルトテストについて」
- 12, 江草 安彦「重症心身障害児の療育と発達診断」
- 13, 森永 良子「乳幼児期の心理検査の問題点」
- 14, 寺島 誠一「小児科医が実施する発達検査の限界」
- 15, 児玉 省「心理学的角度からの検討」
- 16, 長畑 正道「小児の行動計測をめぐる方法論上の問題点について」
- 17, 高木俊一郎「条件反射学的診断法」

**第22回小児精神神経学研究会**（掲載誌11巻1・2号）

1970年10月15日 久留米市；久留米大学医学部図書館，会長；船津雄一郎  
主題；「重度および重症心身障害児」  
一般演題；12題

**第23回小児精神神経学研究会**（掲載誌11巻3・4号）

1971年6月5日 横浜市；神奈川県立子ども医療センター，会長；須川 豊  
主題；「小児医療における精神神経疾患」  
一般演題；21題  
施設見学

**第24回小児精神神経学研究会**（掲載誌12巻1・2号）

1971年10月7日 盛岡市；岩手大学医学部，会長；若生 宏  
主題；「問題児の相談と治療について」  
一般演題；15題

**第25回小児精神神経学研究会**（掲載誌12巻3・4号）

1972年4月23日 東京；島田療育園，会長；小林提樹  
主題；「小児精神神経学領域における follow up」  
一般演題；13題  
施設見学

**第26回小児精神神経学研究会**（掲載誌13巻1号）

1972年11月9日 前橋市；群馬県民会館小ホール，会長；松村龍雄  
主題；「性の発達としつけ」  
パネル；

- 1, 辻 達彦「性の発達としつけ—医学教育の立場から—」
- 2, 平井 信義「性の発達としつけ—発達の立場から—」
- 3, 佐藤 ち江「性の発達としつけ—学校保健の立場から—」
- 4, 瀧口 悟「性の発達としつけ—青少年指導の立場から—」
- 5, 登丸 福寿「性の発達としつけ—精薄施設の立場から—」
- 6, 高木俊一郎「性の発達としつけ—特殊教育の立場から—」

**第27回小児精神神経学研究会**（掲載誌13巻2・3・4号）

1973年6月30日 東京；安田生命ビル9階講堂，会長；石橋泰子  
主題；「子どもの発達としつけ」  
一般演題；21題

**第28回小児精神神経学研究会**（掲載誌14巻2号）

1973年10月25日 徳島市；徳島大学講堂，会長；宮尾益英



主題；「情緒障害」

一般演題；16題

### 第29回小児精神神経学研究会（掲載誌14巻3号）

1974年6月9日 東京；全国心身障害児福祉財団，会長；千羽喜代子

主題；「こどもの行動の正常と異常」

一般演題；16題

### 第30回小児精神神経学研究会

1974年11月5日 東京；東京慈恵会医科大学高木会館，会長；国分義行

一般演題；18題

### 第31回小児精神神経学研究会（掲載誌15巻4号）

1975年6月11日 東京；全国心身障害児福祉財団，会長；船川幡夫

主題；「思春期とその周辺」

一般演題；13題

### 第32回小児精神神経学研究会

1975年10月2日 弘前市；弘前市民会館，会長；泉 幸雄

一般演題；10題

特別演題；伊豆通信病院小児リハビリテーション科 森永良子

「学習障害の心理神経学的診断について」

### 第33回小児精神神経学研究会

1976年5月22日 東京；東京医科大学同窓会館，会長；本多輝男

主題；「精神的治療をめぐる」

一般演題；21題

### 第34回小児精神神経学研究会（掲載誌17巻1号）

1976年10月20日 長崎市；長崎市民会館，会長；浅野清治

一般演題；24題

### 第35回小児精神神経学研究会

1977年6月11日 伊勢原市；東海大学医学部2階B講堂，会長；牧田清志

一般演題；28題

### 第36回小児精神神経学研究会

1977年10月17日 横浜市；産業貿易センター，会長；入江英博

一般演題；27題

### 第37回小児精神神経学研究会

1977年11月 東京；講演会「アレルギーの心身医学」，世話人会

### 第38回小児精神神経学研究会（掲載誌25巻3号，26巻1・2号）

1978年4月 東京；講演会「いわゆる発達検査の検討」，世話人会  
静岡大学教育学部，新井清三郎

### 第39回小児精神神経学研究会（掲載誌18巻2号）

1978年6月3日 東京；東京医科大学同窓会館，会長；小林提樹  
主題；「行動と発達」

特別講演；

- 1, 早稲田大学文学部 小島謙四郎「乳児期の母子関係と子どもの人格形成」
- 2, 静岡大学教育学部 新井清三郎「行動と発達—A. Gesellの研究をめぐって—」

シンポジウム；「行動と発達」

- 1, 秋山 泰子「精神神経障害の立場から」
- 2, 平井 信義「児童臨床の立場から」
- 3, 原 ひろ子「文化人類学の立場から」

### 第40回小児精神神経学研究会

1978年10月20日 鳥取市；よなごプラザ，会長；堀田正之  
一般演題；19題

### 第41回小児精神神経学研究会（掲載誌19巻1・2号）

1979年6月2日 東京；東京医科大学同窓会館，会長；小林提樹  
一般演題；26題

### 第42回小児精神神経学研究会（掲載誌19巻4号）

1979年10月31日 東京；上智大学，会長；平井信義  
主題；「治療の実際をめぐって」  
一般演題；22題

### 第43回小児精神神経学研究会（掲載誌20巻2号）

1980年6月21日 東京；東京医科大学同窓会館，会長；長瀬又男  
主題；「発達障害の早期診断」  
一般演題；9題

### 第44回小児精神神経学研究会（掲載誌20巻3・4号）

1980年11月1日 静岡市；静岡交通ビル4階，会長；新井清三郎  
主題；「発達小児科学をめぐる精神神経の問題」

一般演題；16題

**第45回小児精神神経学研究会**（掲載誌21巻4号）

1981年5月23日 東京；東京医科大学同窓会館，会長；中川四郎

主題；「障害児・問題児と親子関係」

一般演題；19題

**第46回小児精神神経学研究会**（掲載誌22巻4号）

1981年9月24日 札幌市；札幌市教育文化会館，会長；今村重孝

一般演題；24題

**第47回小児精神神経学研究会**（掲載誌22巻2号，23巻3・4号）

1982年5月29日 大阪市；大阪薬業年金会館，会長；高木俊一郎

主題；「慢性疾患児に対する精神・心理的配慮・指導」

一般演題；19題

討議；患児に対するMental care

話題提供；森本恵美子「入院児をとりまく状況についての実態調査」

**第48回小児精神神経学研究会**（掲載誌22巻3号，23巻1号）

1982年9月29日 那覇市；沖縄県労働福祉会館，会長；平山清武

一般演題；18題

特別講演；琉球大学教育学部 吉川武彦「沖縄の障害児保育の現状と課題」

**第49回小児精神神経学研究会**（掲載誌24巻1号）

1983年6月25日 東京；上智大学，会長；余語毅男

一般演題；17題

特別講演；上智大学文学部社会福祉学科 松本栄二

「社会福祉教育におけるソーシャルワーカーの養成について」

**第50回小児精神神経学研究会**（掲載誌23巻3・4号，24巻3・4号）

1983年10月27日 東京；慈恵会医科大学高木会館，会長；甘楽重信

主題；「心身障害児の療育に関する研究」

一般演題；17題

**第51回小児精神神経学研究会**（掲載誌25巻2・3号）

1984年6月30日 東京；武蔵野赤十字病院内短期大学講堂，会長；丹羽直久

主題；「小児の医療環境をどう準備するか」

一般演題；10題

施設見学

**第52回小児精神神経学研究会**（掲載誌24巻3号, 25巻4号）

1984年10月21日 名古屋市；名古屋市立大学病院5階大ホール, 会長；斉藤久子  
主題；「言語障害（特に追跡調査例について）」

一般演題；16題

**第53回小児精神神経学研究会**（掲載誌25巻1号, 26巻2号）

1985年5月11日 東京；東医健保会館3階ホール, 会長；二木 武  
主題；「摂食と排泄の発達および障害」

一般演題；19題

特別講演；東京都立母子保健院 二木 武

「小食・発育不良児の保育をめぐる心身医学的検討」

**第54回小児精神神経学研究会**（掲載誌25巻3号, 26巻1・2号）

1985年10月19日 静岡県田方郡；伊豆通信病院多目的ホール, 会長；上村菊朗  
主題；「発達による臨床像の推移」

一般演題；19題

施設見学

**第55回小児精神神経学研究会**（掲載誌26巻1・3・4号）

1986年6月28日 つくば市；筑波大学会館ホール, 会長；長畑正道  
主題；「小児の臨床神経心理学」

一般演題；22題

特別講演；筑波大学心身障害学系 長畑正道「学習障害と小児の神経心理学」

**第56回小児精神神経学研究会**（掲載誌26巻3・4号）

1986年11月15日 倉敷市；川崎医科大学メディカルミュージアム, 会長；江草安彦

一般演題；23題

**第57回小児精神神経学研究会**（掲載誌27巻1・2・4号）

1987年6月20日 東京；東京医科大学病院6階臨床講堂, 会長；本多輝男

一般演題；26題

**第58回小児精神神経学研究会**（掲載誌27巻3号）

1987年11月7日 広島市；広島市児童総合相談センター, 会長；片野隆司

一般演題；16題

**第59回小児精神神経学研究会**

1988年6月4日 東京；日本大学板橋病院記念講堂, 会長；中村博志

一般演題；26題

**第60回小児精神神経学研究会**（掲載誌29巻1・2号）

1988年10月15日 東京；慶応義塾大学北里講堂，会長；秋山泰子  
主題；「学習障害児の治療と教育」

一般演題；17題

特別講演；前イリノイ大学児童研究所 Helmer R. Myklebust

「A Psychoneurological Approach to Learning Disabilities」

**第61回小児精神神経学研究会**（掲載誌29巻3号，31巻1号）

1989年6月24日 福島市；福島県立医科大学病院，会長；熊代 永  
一般演題；26題

特別講演；慶応義塾大学医学部小児科 秋山泰子

「わが国小児精神神経学研究会の進歩と21世紀の課題」

**第62回小児精神神経学研究会**（掲載誌29巻4号）

1989年10月28日 神戸市；神戸国際会議場，会長；隠岐忠彦  
主題；「親子関係の病理」

一般演題；21題

**第63回小児精神神経学研究会**（掲載誌30巻3号）

1990年6月23日 岐阜市；岐阜大学医学部外来棟4階講堂，会長；若林慎一郎  
一般演題；30題

**第64回小児精神神経学研究会**（掲載誌30巻4号）

1990年10月13日 栃木県河内郡；自治医科大学地域医療情報研修センター  
会長；柳澤正義

一般演題；23題

**第65回小児精神神経学研究会**

1991年6月15日 倉敷市；川崎医療福祉大学講義棟，会長；江草安彦  
一般演題；35題

会長講演；川崎医療福祉大学 江草安彦「心身障害児と地域医療・福祉」

**第66回小児精神神経学研究会**（掲載誌31巻4号）

1991年10月19日 東京；東邦大学医学部学生ラウンジ，会長；諸岡啓一  
主題；「言語発達遅滞」

一般演題；23題

\*\*\*\*\* 1992年1月1日より「日本小児精神神経学会」会名変更\*\*\*\*\*

### 第67回日本小児精神神経学会（掲載誌32巻3・4号）

1992年6月26・27日 静岡市；静岡県医師会館，会長；長畑正道

一般演題；40題

特別講演；神奈川県立こども医療センター精神科 田野稔郎

「小児病院における精神科医療」

シンポジウム；「神経心理学と小児の学習障害」

- 1, 小枝 達也「神経心理学的にみた学習障害の症例；小児科」
- 2, 八島 祐子「神経心理学的観点からみた学習障害；精神科」
- 3, 大石 敬子「学習障害児の指導；読み書き障害を中心として」
- 4, 前川 久男「学習障害と神経心理学的テスト；Luria-Dasmodelに基づく新しいテスト」
- 5, 吉野 公喜「小児のdichotic listening test」

### 第68回日本小児精神神経学会

1992年10月7日 東京；東京大学医学部山上会館，会長；鴨下重彦

一般演題；29題

### 第69回日本小児精神神経学会

1993年7月3日 高崎市；サンパレス，会長；黒梅恭芳

一般演題；30題

### 第70回日本小児精神神経学会（掲載誌34巻1・2号）

1993年10月30日 東京；東京慈恵会医科大学中央講堂，会長；前川喜平

一般演題；26題

特別講演；東京慈恵会医科大学精神神経科 牛島定信

「初潮周辺症候群（仮称）をめぐって」

シンポジウム；「極小未熟児の発達」

- 1, 松石豊次郎「極小未熟児の発達；神経学的立場から」
- 2, 斎藤 久子「極小・超未熟児の学齢期；学習障害について」
- 3, 森永 良子「極小未熟児の認知能力の神経心理学的発達」
- 4, 神谷 育司「低出生体重児の母子関係；その問題点と今後の課題について」

### 第71回日本小児精神神経学会（掲載誌35巻1号）

1994年6月17日 名古屋市；今池ガスホール，会長；和田義郎

主題；「自閉症のライフサイクル」

一般演題；26題

会長講演；名古屋市立大学医学部小児科 和田義郎

「先天性代謝異常症の精神症状発生に関する一考察」

話題提供；「自閉症のライフサイクル」

- 1, 称宣田初恵「乳幼児期；1歳6ヶ月健診でチェックされた自閉症児について」

- 2, 山田 陽子「乳幼児期；療育グループの歴史的変遷」
- 3, 柴田あかり「乳幼児期；自閉症児の統合保育」
- 4, 加藤 祥二「学校教育；自閉症児の学校教育」
- 5, 平沼 貞義「学校教育；義務教育終了時の自閉症児」
- 6, 清水 一広「成人；地域における施設の役割」
- 7, 秋田 伸子「成人；自閉症児・者の自立」

#### 第72回日本小児精神神経学会（掲載誌35巻3号）

1994年10月21・22日 札幌市；札幌サンプラザホテル，会長；今村重孝

主題；「重症心身障害の諸問題」

一般演題；40題

シンポジウム；「重症心身障害の諸問題」

- 1, 鈴木 文晴「重症心身障害の疫学」
- 2, 北住 映二「重症心身障害児の医療」
- 3, 今村 重孝「重症心身障害児の実態」
- 4, 高橋 義男「中～重症心身障害児における小児脳神経外科の役割」

#### 第73回日本小児精神神経学会（掲載誌36巻1号）

1995年6月9・10日 大阪市；大阪メディカルホール，会長；一色 玄

一般演題；30題

特別講演；大阪大学人間科学部・淀川キリスト教病院 柏木哲夫

「ターミナルケアをめぐる」

パネル；「小児慢性疾患における心身医学的問題」

- 1, 長畑 正道「慢性疾患における親子の心理適応；障害児の場合」
- 2, 岡田 義昭「内分泌疾患における低身長児に関わる心身医学的問題」
- 3, 豊島協一郎「アレルギー児に関わる心身医学的問題」
- 4, 三宅 捷太「てんかん児に関わる心身医学的問題」
- 5, 一色 玄「糖尿病児に関わる心身医学的問題」

緊急報告「阪神大震災における小児のからだと心の問題」

- 1, 中村 肇「阪神・淡路大震災における大学小児科での小児保健活動」
- 2, 富田 和己「阪神大震災「心のケア」活動；被災地外の活動」
- 3, 三島 照雄「阪神大震災「心のケア」活動；被災地での活動」
- 4, 福井 初美「市川市に避難してきた阪神・淡路大震災の被災児童の心のケアの経験」

#### 第74回日本小児精神神経学会（掲載誌36巻3号）

1995年11月11日 調布市；白百合女子大学講堂，会長；森永良子

一般演題；32題

特別講演；前イリノイ大学児童研究所 Helmer R. Myklebust

「社会的認知の障害(右脳症候群)」

### 第75回日本小児精神神経学会

1996年6月15日 三島市；三島市民文化会館，会長；二上哲志

主題；「学習障害と近接領域」

一般演題；21題

### 第76回日本小児精神神経学会（掲載誌37巻1号）

1996年10月18日 東京；全共連ビル大会議室，会長；帆足英一

主題；「入院児のQOL向上をめざして」

一般演題；25題

会長講演；東京都立母子保健院 帆足英一「小児医療における療養環境の実態と問題点」

シンポジウム1；「入院児のQOL向上をめざして」

- 1, 中村 崇江「小児病棟における保母の役割」
- 2, 田代 弘子「入院児の生活の質の向上をめざす看護婦の役割」
- 3, 藤本 保「小児科医からみたコ・メディカルの役割」
- 4, 前田 光哉「小児医療における療養環境問題」
- 5, 横田 雅史「小児医療における教育問題」

パネル；「被虐待児への援助をめぐる」

- 1, 西沢 哲「子どもの心理療法」
- 2, 鈴木 朝子「被虐待児・家族への援助；乳児院から」
- 3, 長谷川重夫「養護施設における援助」
- 4, 坂井 聖二「子どもの虐待に於ける小児科医の役割」

### 第77回日本小児精神神経学会

1997年6月21日 広島市；広島国際会議場，会長；片野隆司

主題；「療育と支援のあり方」

一般演題；20題

会長講演；広島市児童総合相談センター 片野隆司「通園療育の歴史と課題」

パネル；「療育と支援のあり方」

- 1, 北原 侑「運動発達の遅れを伴う知的障害」
- 2, 原 仁「小児精神医学からみた知的障害」
- 3, 小林 隆児「児童精神医学の立場からみた発達障害の生涯発達」
- 4, 三浦 幸子「療育機関からみた家族支援はいかにあるべきか」
- 5, 竹内志津恵「家族の視点から見た知的障害」
- 6, 岡田 隆介「家族支援の方法論からみた知的障害」

### 第78回日本小児精神神経学会（掲載誌38巻2号）

1997年11月22日 静岡市；静岡県医師会館，会長；杉山登志郎



主題；「教育と小児精神医学」

一般演題；28題

特別講演；ロンドン大学精神医学研究所，社会遺伝と発達研究センター

Francesca Happé「自閉症とこころの理論」

**第79回日本小児精神神経学会**（掲載誌38巻3号，39巻1・2号）

1998年6月19・20日 福井市；福井県国際交流会館，会長；平谷美智夫

一般演題；26題

会長講演；福井県小児療育センター 平谷美智夫

「心身障害児（特に知的障害児・者）の療育における教育・福祉・医療の連携」

シンポジウム；「LDとその関連の発達障害児の認知・神経機構（LD概念の再考）」

- 1, 竹田 契一「大脳機能とLDについて；特に聴覚系の機能を中心に」
- 2, 森永 良子「非言語性LD（NLD）」
- 3, 川崎 千里「運動機能の障害；「不器用」の評価と対応について」
- 4, 三橋 美典「注意と記憶の障害；認知心理学・生理心理学的にみたLDと注意欠陥多動障害」
- 5, 中根 晃「LDと自閉症」
- 6, 長畑 正道「LDという用語を医学から教育の領域へお返ししよう」

パネル；「知的障害児・者の医療・保健のネットワーク」

- 1, 長谷川知子「障害をもつ子に対する医療機関の役割について」
- 2, 石井 浩二「学童期の問題点，地域社会をまきこんだ養護学校の保健活動」
- 3, 吉岡 茂治「成人後の知的発達障害児（者）の処遇の実態；健康管理活動体系について」
- 4, 森口 良子「知的障害児・者を地域で支える；地域の保健婦として思うこと」
- 5, 伊東三枝子「家庭生活・地域生活を支える保健所保健婦の役割」
- 6, 北 淳子「福井大学教育学部附属養護学校卒業生の在学中と卒業後の健康・健康管理の実態」
- 7, 伊藤 真恵「知的障害児施設「足羽学園」における健康管理の実践活動」
- 8, 本家 一也「進行性筋ジストロフィーのケア」

**第80回日本小児精神神経学会**（掲載誌38巻4号，39巻3号）

1998年11月20・21日 東京；東京医科大学病院6階臨床講堂，会長；星加明德

一般演題；23題

会長講演；東京医科大学小児科 星加明德「小児の睡眠時異常行動」

特別講演；川崎医療福祉大学 秋山泰子「私にとって小児精神神経学とは」

教育講演；文教大学教育学部 長畑正道「いま，子どもの心の問題をどう考えるか」

\* \* \*



プレイセラピー  
遊戯法

## 子どもの心理臨床入門

飽田 典子 著

今年の4月、著者の飽田さんから彼女の初めての単著である「遊戯法」が送られてきた。彼女は大学時代の同級生である。教育研究所から大学に移って5年、時間もできていよいよこれまでの実践の蓄積のまとめに入ったんだ、そういう年齢になったんだとしみじみ思った。しかしタイトルを見て驚いた。私の彼女に対するイメージはクラスの中でも最も「子ども好きでなく」最も理屈っぽく、反骨精神の旺盛な人という印象だったからである。したがって彼女が長らく携わっていた教育臨床の場では真先に「親担当」になる人という私の「思い込み」があった。

ページを開けると案の定そのことに触れて、「どういうわけか遊戯療法からこの世界に入りながら、経験を積み、年齢を重ねるにつれて、いつしか(遊戯療法が適用されるような)子どもの臨床から離れて、大人または思春期以降を対象とするようになるという不文律のようなものがある」が、やる人がいないならやるっきゃないといっているうちに、彼女自身が「遊戯療法の魅力にはまってしまった」というのである。しかしこの領域における「専門書」がないために「手探りで」やってこざるえなかったという。この書物はいわばそんな彼女のこれまでの「臨床実践記録」である。そして私の思い込み通り「やる以上は徹底してやる」まじめな彼女を文中の至る所に発見した。

相談の申し込みの段階から終結に至るまで、各段階(時期)ごとに遭遇する実際的な問題を、まさに「かゆいところに手が届く」ように、例えば親からの相談申し込みの電話において、子どもに対してどのように来談について説明するかという、いわば相談の始まる前の段階から丁寧にこだわっている。すでにそこから「遊戯法」は始められているというのである。そして「遊戯法」が始まってからの問題として、「制限」についてかなりのページをさいて解説している。このことこそ彼女が本気で子どもと向き合っている証である。

全体を通してしつこいくらい丁寧である記述は、実際の臨床の場での彼女の敏感すぎるほどの感度でもって子どもに対していることの現れである。「薬に頼らず、手術という外科的な手段にも頼らずに、こちらの心理学的専門性だけを頼りに、こころの問題に接近する作業は、心理学の中でもとりわけ純粋性の高い作業といえよう」と述べているように、子どもと関わっている人、これから目指そうとしている人は例えどんな領域の人であっても、感性を磨くためにぜひ読んでほしい書物である。

さらにタイトルが「遊戯療法」でなく「遊戯法」であること、「治療者あるいは患者(患児)もそれぞれ担当者・子どもとして、あえて医学用語に依存しない表現を心がけた」ことも、「臨床心理士としてのわきまえ」としての彼女のこだわりである。

山崖俊子(津田塾大学ウェルネスセンター)

新曜社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 本体価格3,200円 332頁 1999年4月20日第1版発行

小児の精神と神経 39巻3号・1999年9月

# 青少年犯罪に関する日本小児精神神経学会提言

「小児の精神と神経」第41巻第1号 別刷

(2001年3月)

日本小児精神神経学会



# 青少年犯罪に関する日本小児精神神経学会提言

平成13年3月  
日本小児精神神経学会

## I. 目 的

最近、青少年の犯罪がマスコミを騒がせている。特に、5年前に起きた小学生連続殺人事件と最近続いた青少年によるいくつかの殺人事件は、その無差別さや動機のあいまいさから社会全体の不安を引き起こし、少年法改正の動きまでに至った。このような犯罪の被害に遭った方々とそのご遺族の方々の無念さを思うと、子どもの心身の健康を守るという社会的役割を持つ本学会として、深い哀悼の気持ちを覚えるとともに、今後に向けての大きな社会的責任を痛感せざるを得ない。本提言は、学会としての見解を表明し、保健医療を含めた社会がなすべき方向性を、小児精神神経学の立場から示すことを目的としている。

## II. 現 状

### 1. 事件に対する学会の立場

事件を起こした個々の子ども達に関しては、小児精神神経学的立場として解釈し得る情報を持ってはいない。さまざまな情報がマスコミを通して氾濫してはいるが、その情報は断片的であり、そうした情報のみから犯罪に至った背景を小児精神医学的に判断することは適切とは言えない。

しかしながら、相次いで青少年による事件が発生しているという事実は、少なくとも、このような殺人、もしくはそれに匹敵する犯罪に至るほどの精神状態にある子ども達が少なからず存在していることを示している、と本学会は認識するものである。さらに、そうした子ども達の中に、犯行に至る以前に、精神・行動面の問

題を抱え、医療機関を含めた相談機関を訪れたことのある子ども達がいるという事実は、子どもの精神神経の問題に関わっている本学会会員が、日常診療の中でそうした子ども達を診療する、あるいは、診療している可能性があることをも示している。すなわち、本学会は、一連の青少年事件に対して、小児精神神経学の研究・診療に関わる社会的な責任から深い関心と憂慮の念を示すのみならず、事件と関係する子ども達と直接接する可能性があるという点で、自らの問題としても対処していくことを表明するものである。この決意の下に、本学会が持っている知識と経験を基に現状を分析し、悲劇を繰り返さないため社会としてどのような方策を採るべきかを提言する。

### 2. 子どもが犯罪に至る要因に関する研究の現状

子どもが犯罪に至る精神状況は、一つの原因で作り出されるものではない。元々持っている子どもの素因と胎児期及び出生後の外界の環境との相互作用によって形成されるものである。後者に関しては、親子関係、家族関係、友人関係、学校状況など、さまざまな要因がある。現在までの内外の研究からは、子どもの犯罪や攻撃性に関わる問題として、①攻撃性や衝動性の遺伝素因、②認知能力の偏り、③愛着形成不全の影響、④自己制御能力の問題、⑤枠組み形成の問題、⑥家庭内や学校での暴力による問題解決の学習、⑦虐待やいじめによるトラウマからの解離や攻撃性の問題、⑧メディアの影響、⑨第二次性徴期の心身の変化への不適応、⑩他者に受け入れられないことからくる自尊感情の低下、などが注目されている。さらに、最近では、

子どもの健全な発達を阻害する要因を模索するのみならず、抵抗要因 (resilient factor) をも追求する必要性が指摘されてきている。

しかしながら、子どもの犯罪や攻撃性に関する研究は、それ自体の歴史が浅く、確立したモデルはできあがっていないのが実状である。特に、わが国では、犯罪に至った子ども達の素因や生育歴、阻害因子や抵抗因子に関する精神医学的視点をも含めた研究は海外に比べて非常に少ない。これは、一つには、わが国の司法制度が、結果としてそのような研究を困難にしていることが背景として考えられるであろう。

一方、これらの要因は複雑に絡み合っている。これは、単に、複数の要因がお互いに関係し合っているということだけではない。最近の研究は、年少児期のストレスが脳の生物学的変化をももたらし、成人期に至って固定化され精神的問題を出現させるという、時系列上の関係性があることまでも示唆するようになってきている。このような知見を考えると、人格形成途上にある子ども達の犯罪に対して、成人の精神医学の視点から「病気」であるかどうかを中心に論じることとは、必ずしも適切な検討とは思えない。現在の状態が将来変化することを前提とした小児精神神経学の視点からの検討が不可欠であろう。さらに、発達途上であることを考慮するならば、子ども達の健全な精神発達を促したり、早期に問題を発見して介入するなどの予防的視点、つまり、小児精神保健の視点も重要であると考えられる。しかしながら、わが国においては小児精神保健の研究や実践も未熟な分野であり、その手法も十分には確立されていないことを認めざるを得ない。

このように、現在のわが国は、子どもの犯罪の予防と対応に関する研究のみならず、広く子どもの精神保健全般に関する研究が極めて不十分な状況にあると言わざるを得ないのである。

### 3. 小児精神保健医療の現状

現在のわが国の小児精神保健医療は、精神保

健に関心を持つ小児科医と数少ない小児精神科医、および関係するコ・メディカルワーカーによって辛うじて行われている状況にある。精神的問題を持つ小児を入院させて治療ができる専門的医療機関は、わが国全体で数えるほどしかない。これは、小児精神医学自体の歴史の浅さや手法の困難さに加えて、医学部での教育や卒後トレーニングがほとんどなされていないこと、および、診療報酬の低さなどがその原因と考えられる。

そのような状況下であっても、わが国の小児精神医学は、時代の変化に応じて子どもの精神的健康を求めて努力を重ねてきている。

ところで、小児精神保健医療の主な関心の対象は、時代とともに変化してきている。1970年代までは発達障害が中心であったが、1980年代からは神経症的不登校が最も注目されてきた。本学会の発表演題の流れにも、同じ傾向を見ることができる。しかし、この数年間、新しい傾向が顕著になってきた。それは、多動、衝動性、攻撃性といった外的に行動化する問題を持つ子ども達への関心の高まりである。その背景には、これらの問題を持って医療機関や相談機関を訪れる親子が急速に増加していることがある。これらの問題に対して、小児精神保健医療が貢献できることは非常に大きいですが、こうした問題に対処できる小児科医や小児精神科医の不足、他機関との連携や入院加療が可能な施設の不十分さのために、問題の急増に追いつけないでいる状況であり、その現状は危機的状態にあるといえるほどである。

さらに、小児精神保健は、現在のわが国においては母子保健と精神保健の境界領域にあり、縦割り行政の中でどちらからも忘れられた領域となっており、小児精神保健に関して、国としてのシステムもほとんど構築されていないに等しい状況がある。

また、小児精神保健は、教育・児童福祉との連携が欠かせない分野である。こころの問題を

抱える子どもには、治療的な関わりのほかに、成長・発達を保証する場が必要だからである。しかしながら、そうした関連領域との連携もほとんど構築されていない。学校では現場の教師や養護教諭・スクールカウンセラーが、児童福祉では例えば児童養護施設で施設職員が、攻撃性やその他の問題を抱える子ども達を前に、それぞれが試行錯誤的に対応しているのが現状である。これらの領域では、小児精神保健医療との関係が乏しいのみならず、小児精神保健に関する専門職の配置も少なく、担当者の熱意と努力に頼った対応が中心になっている。

このように、わが国の小児精神保健医療およびその周辺領域もまた、小児精神保健の研究と同様、整備されていない状況に置かれていると言わざるを得ない。

### Ⅲ. 課 題

上述のように、青少年事件を検討し有効な対応方法を考えていく上で、本学会は、小児精神保健の研究と実践を向上させていくことが有用であると考え。しかしながら、わが国の小児精神保健領域には、以下のような課題が存在する。

#### 1. 連携・学際システムの不足

##### 1) 連携対応システムの整備不足

青少年事件への実際的で有効な対応を行うためには、保健・医療・教育・福祉・警察・司法・地域・民間団体などが連携して、それぞれの役割を果たすことが必要である。

これまでのわが国においては、それぞれの領域で個別に対応が行われてきた。しかし、それぞれの領域からの個別の視点があるのに対して、子どもや家族の側は分割できるものではない。したがって、真に有効な対応を行うためには、支援する側が連携する必要があるであろう。現在のわが国には、そうした連携が取れるシステムがほとんど存在しない。例えば、現在、非行に至りそうな子どもを持った親は、その状況に

応じて、学校や医療機関や警察や児童相談所に相談に行くであろうし、実際に非行に至った子どもは警察に補導され、児童相談所を通して福祉施設である児童自立支援施設に措置され、あるいは司法を通して矯正施設に入所することになる。しかしながら、これらの機関が一堂に集まり、一人の子どもの問題を検討することが行われているところは極めて少ない。わずかに、最近、社会の関心の高まりを背景として、子ども虐待に対してそのような対応方法が採られるようになってきたに過ぎない。

今後は、攻撃性や暴力、犯罪と関係する子ども達に対するそれぞれの機関の技能を充実させ、お互いに相補う形で役割を担うことができるように整備し、連携のシステムを構築することが重大な課題である。

#### 2) 行政レベルでの小児精神保健システムの整備不足

現在、小児精神保健に関わる行政システムは、子どもの年齢によって、母子保健、学校保健、精神保健と分かれているところがほとんどである。例えば、暴力の問題を持つ子どもが、幼児期は保健婦が相談にのり、小学生になると学校や教育センターが、そして、大人になると精神保健福祉センターが相談を受けることになるが、各機関間の連絡は皆無に近い。これらの保健行政を統合し、子どもの精神的問題を総合的に扱うことのできるシステムが必要である。保健所、学校、精神保健福祉センターなどの現在のシステムを利用しながら、効率よく子どもの精神的問題の予防、早期発見、介入、治療が行われるようなシステムの構築が早急に望まれる課題である。

#### 3) 事例に学ぶ学際的研究システムの欠如

小児精神保健分野の研究は、実験室内における実験で行えるものではなく、実際の事例の検討を通してしかできないものである。また、小児精神保健医療は臨床の一分野であり、実際の事例から学ぶことが非常に重要でもある。しか

しながら、わが国においては、専門家に対しても情報が閉ざされており、むしろ、専門家までもがマスコミ報道に翻弄されてしまう傾向がみられる。

一方、青少年事件をはじめとして、子どもの攻撃性や暴力の問題の検討は、小児精神保健医療一分野だけでできるものではなく、教育、心理、福祉、司法、社会学など、多様な視点からの検討を複合させることで可能となる、まさしく学際的な問題である。残念ながら、現在のわが国においては、そのような学際的研究システムは皆無である。

青少年事件の予防・早期発見・介入・治療の方法論を確立するために、わが国に事例を通して検討するような学際的研究システムを構築することが急務の課題といえる。それなしには、どの分野においても対応の方法論は発展せず、悲劇をくい止める方向性を見出すことは不可能であろう。

## 2. 小児精神保健のインフラストラクチャーの不足

### 1) 医療・医学領域

#### (1) 小児精神保健医学の教育体制の不足

現在、わが国の医学部教育の中で、小児精神保健医学の講義、実習は6年間で1、2時間ある程度がほとんどである。そのため、医学部を卒業しても、子どもの精神発達の問題に関して、適切な評価・対応（紹介も含めて）ができる医師は、小児科医、精神科医を問わず少数である。

一方、精神保健上の問題を持つ子どもも、その問題に気がつかれないまま、かかりつけの小児科医を風邪等で受診していることは少なくない。子どもの精神保健上の問題に対して、プライマリケア段階において早期発見、初期対応が行われるならば、その予防的効果には大きなものがあると考えられる。そうした医療体制を構築するために、大学卒前卒後の医学教育の中で小児精神保健医学の教育を明確に位置づける必要がある。

#### (2) 小児精神保健医療の担い手の不足

小児精神保健医療を担う医師とコ・メディカルワーカーは、危機的に少ない。現在、わが国において熱心に小児精神保健医療活動を行っている医師の場合、その医師の診察を受けるためには、初めての受診であれば、最低で数カ月、長い場合には1年近く待たされるのが普通である。小児精神保健医療に従事する医師とコ・メディカルワーカーの育成システムをつくる必要がある。

#### (3) 小児精神保健医療機関の不足

現在のわが国において、深刻で重大な精神的問題を持つ子ども達を入院させて治療することのできる専門医療機関は数えるしか存在しない。入院治療が望ましい子ども達であっても、家族の犠牲的対応と忍耐によって家庭でケアされているか、大人の精神病棟に押し込められているのが現状である。

子どもが、年齢相当の遊びや教育を保証されながら、その精神的問題の治療を受けることのできる小児精神保健医療機関を全国レベルで整備していくことが必要である。

### 2) 小児精神保健の関連領域

#### (1) 児童福祉・教育領域における専門性の不足

小児精神保健医療と密接に結びつく児童福祉・教育の領域において、子ども達の発達やこころの問題を、その領域の視点から適切に評価し、対応できる専門性を持ったスタッフが大きく不足している。特殊教育の教員免許や福祉士等の専門資格は存在するものの、そうした資格を持つ人々が必要とされる現場・施設に十分に配置されてはおらず、児童福祉・教育領域における専門的な対応の不足の大きな要因となっている。子どもの攻撃性は、その始まりは、学校現場で見られることが少なくないことを考えるならば、特に、教育領域における専門性の不足を改善することの重要性が指摘される。

児童福祉、教育領域において、子どもの心の



発達とその問題に関する知識と対応技術の教育・研修を受けた職員を配備していくことが、小児精神保健の向上のために必要である。

#### Ⅳ. 提 言

上記の課題を解決するために、具体的な対策が必要である。本学会としては以下の提言を行う。

##### 1. 連携・学際システムの構築

###### 1) 連携の場の設置

保健・医療・福祉・教育・警察・司法・地域・民間団体などが連携して子どもの健全な心の発達を支えるために、国、県、市町村、それぞれの行政単位において、子どもの精神的健康を検討する会議を設置する。この場合、児童虐待防止法により各地域でつくられている連携システムと連携することが望ましい。なぜならば、児童虐待は、攻撃的で暴力的な子どもとの関連が深いからである。

###### 2) 小児精神保健の相談システムの設置

###### (1) 保健活動における小児精神保健の充実

母子保健、学校保健における小児精神保健体制の不備を補うために、各地域における小児精神保健医療の専門家情報を一元化し、母子保健担当者や学校保健担当者が相談できるシステムを構築する。

さらに、母子保健と学校保健の中に、小児精神保健を本来の業務として明確に位置づける。具体的には、母子保健を担う小児科医や保健婦、および、学校保健を担う校医や養護教諭に、小児精神保健医学の研修を義務づける。

###### (2) 児童福祉における小児精神保健の充実

児童相談所および児童自立支援施設や児童養護施設関係者が相談できるよう、地域において相談担当の小児精神保健医療の専門家を設置する。さらに、「健やか親子21」でも指摘されているように、情緒障害児短期治療施設を各県に配置する。各施設合同の会議を、毎年開催するようにし、その会議に、地域の小児精神保健医

療の専門家も出席するような制度をつくる。

##### 3) 学際的研究体制の早期推進

子どもの行動化の問題に対する保健・医療・福祉・教育・司法などからなる学際的な研究を推進するために、上記連携のための会議の中に、事例検討を通して研究を行う研究班を設置する。プライバシーに配慮しながらも、今後の悲劇の防止に役立てるための方法を確立するという明確な目的をもった研究とすることが重要である。

##### 2. 小児精神保健のインフラストラクチャーの充実

###### 1) 医療・医学領域

###### (1) 医学教育

医学部・医科大学において小児精神保健医学教育を義務づけ、国家試験にも含める形を取る。

###### (2) 医師の卒後教育

小児科の卒後教育に小児精神保健医学の研修を入れることを推奨する。精神科の卒後教育において、母子保健、学校精神保健の知識を習得することを義務づける。

###### (3) 専門家の育成

医学部・医科大学において、小児精神保健医学の専門家を養成するトレーニングシステムを作ることを義務づける。小児科の中に予防や早期発見や介入のできる小児精神保健を中心のできる小児精神保健専門医を養成し、精神科の中に子どもの精神障害の治療に主としてかかわる専門医を作るシステムを構築する。

###### (4) 看護婦・保健婦の教育

看護婦・保健婦の教育カリキュラムに小児精神保健医学に関する教育を義務づける。

###### (5) 適切な報酬の検討実施

現在の医療報酬の体系では、小児精神保健医療を行っても全く採算性はない。現時点で、医療報酬で対応するのか、国や地方公共団体の補助によって対応すべきかを早急に検討する必要がある。

###### (6) 小児精神保健医療の専門施設の充実

各県毎に小児に対する精神医療専門入院施設

を設けることを義務づける。どのような形態を取るかは県の実情に合わせた形とする。

## 2) 小児精神保健の関連領域

### (1) 児童福祉・教育領域

児童福祉領域・教育領域とも、子どもの心の問題に対応する専門性、資格を有した人を十分に配置するとともに、日常の処遇担当者を増員し、個別的な対応が可能となる整備を行う。攻撃性が発達の偏りと関係することもあることから、通常学校に特殊教育の資格を有する教員を配備する。

## V. おわりに

社会の変化、子ども達の行動の変化などを鑑みる時、ここにあげた提言は長期の展望ではなく、緊急を要する課題である。できる所から早期に実行に移していく必要がある。そのためには、縦割り行政の弊害を克服し、実質的成果を上げることのできる学際的なプロジェクトチームを設立する必要があるという認識を、本学会は自ら確認するとともに、他医学会および行政に呼びかけるものである。